

より良い「支援」のために ～特別支援教育の視点から～

支持的風土づくりにおいて、「支援」とは、相手の立場や状況、気持ちに応じた援助をし、相手に自信をもたせることです。しかし、子どもたちの中には、成功体験が少ないことなどにより、自分に自信をもてない子どももいます。そのような子どもたちに自信をもたせていくためには、他者から感謝されたり、認められたりする活動や、自分自身の成長を確認する活動がとて重要になります。

「子どもを評価する物差し」をできるだけ多くもつ

右の図は、ハーバード大学教授のハワード・ガドナー氏による「多重知能の理論」をもとに作成したものです。

子どもたちには、それぞれ言葉を効果的に使う、数や論証を有効に使う、歌や音を上手に使う、身体的な強さがあり体で表現する、人間関係づくりが得意など、多様な能力があります。

私たち教師は、このような多様な能力を把握し、生活や学習の中で活躍できる場を作ることが大切です。活動の場を設定する際には、どの子どもも活躍できるようにすること、子ども同士のかかわりやつながり、活動の広がりをつくれるようにすることに配慮します。そして、活動の中で、子どもたちが認められる経験を積み重ねられるようにし、自己肯定感（自信）と学級への所属感を育みたいものです。



「子どもたちが、認められる経験を積み重ねることができる環境」を整える

日々の生活の中で、友達がしてくれることをありがとうのカードに書く、物の受け渡しの際にありがとうと言うなど、日常の些細な行動を誉める（認める）ことで、子どもたち一人一人が「認められている」「大切にされている」と感じることができます。また、運動会、体育祭、総合的な学習で行う様々な体験的活動の後には、友達のがんばりを認め、感謝を伝える活動や、自分自身の成長を振り返る活動を取り入れます。この際、以前の自分と比べて成長した点、優れている点に積極的に目を向けさせることが大切です。

一年間のまとめとして、キャリア・ノートなどを活用し、みんなで成長を振り返り、来年度への活動意欲へと繋げていくことも効果的です。

特別支援学校学習指導要領解説【第4章 第2節】より一部抜粋

知的障害のある児童生徒の学習上の特性等

- 成功体験が少ないことなどにより、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないことが多い。そのため学習の過程では、児童生徒が頑張っているところやできたところを細かく認めたり、称賛したりすることで、児童生徒の自信や主体的に取り組む意欲を育むことが重要となる。

知的障害のある児童生徒の教育的対応の基本

- 児童生徒一人一人が集団において役割が得られるよう工夫し、その活動を遂行できるようにするとともに、活動後には充実感や達成感、自己肯定感が得られるように指導する。